

## 「其面影」の時代：法律と文学（一） 明治三十九年

加藤 百合

### 一、「其面影」の成立

（梗概）学生時代に恩を受けた義理のため、家付き娘に入婿した大学教授小野哲也は、性格の合わない妻や姑との生活から来る不満ゆえに義妹小夜子と恋愛関係を結び、ついにはうらぶれて満州の荒野に消息を絶つに至る：

#### ① 「茶筌髪」

二葉亭四迷は、処女作「浮雲」が中絶してからは、創作の小説を書くことを固辞しており、第二作とされる「其面影」は、大陸放浪などの体験ののち、就職した新聞社への義理からほぼ二十年ぶりに連載小説として筆をとったものである。

この「其面影」は、直前まで取り組んでいた、戦争未亡人の再婚問題をテーマとした小説「茶筌髪」が変形されたものであるということが、定説となっている。

「茶筌髪」は発表されずに終わり、完成した原稿も発見されていない<sup>1)</sup>。しかし、二葉亭自身による「茶筌髪梗概」や、談話筆記「未亡人と人道問題」が残っており、また、構想中の二葉亭が新聞

記事から戦死者の状況を書きぬき、遺族（大尉）の一時金まで計算していることでも二葉亭が戦争未亡人問題を小説化しようとしていたことは、明らかである。

女主人公である若い未亡人は、亡き夫に誓ったように操をたてとおそうとするものの、淋しさに耐えず、親身に相談に乗ってくれる友人の夫（博士）に恋心を抱くようになり、ついに姦通に至る。しかし、賢く情ぶかい理解者であったはずの博士は、愛に応えるような人ではなく、保身第一の小人物であり、親身の相談者であったはずの夫人は、口先ばかりでキリスト教の道徳を説く、冷たいエゴイストであることが判明していき、女主人公は孤立する。二葉亭は、「扁中の人物只女主人公のみハートありて他は皆 without heart 也」と手帳に記している。

若い未亡人と既婚の男性との恋愛の成立（＝賢夫人として万事に行き届いた妻をもちながらその夫をどのように姦通に至らしめるか）、が設定上難しいところでもあり、二葉亭は少しずつ設定を変えつつ試みている。

女主人公の名は草稿中で性格付けとともに幾度も変わるが、その

最後の一つが小夜子であり、そのころから、はあと(心)、ふたつはあと、やれびおりの(破れヴァイオリン)、といった仮題が付されるようになっていく。はじめ、主人公は小夜子であって、恋情と道義(夫への誓い)の間でゆれる心が焦点であった。

西本翠蔭が「著作に関する計画」に、茶筌髪を書きこじらせた二葉亭がついに投げ出し、かなりあたふたと「其面影」の執筆に移ったことを記している。

「其面影」には、戦争未亡人というテーマは影を潜めており、登場人物の設定も性格付けも大きく違っているが、例えば十川信介氏が二作品のつながりを詳細に考察している。

二葉亭は、小夜子を十分に同情を持てる存在として造形したかった<sup>(2)</sup>。だから、芸者でもないのに既婚の男性に近づくことが正当化されるよう、一度は縁付いて夫に死別した同居の妹であるということにし、其の上で、妻である姉時子が養子である夫の身の回りの世話をしないで小夜子に押し付けている、というような、周到なくくみを小夜子のために用意した。

明治三十九年九月九日、二葉亭は、横山源之助に次の調査を依頼している。(再度の依頼である事が文面から読み取れる。)

(前略)

甲某 某の二男、乙某の長女女婿となる

乙某 甲某の女婿となる前に死去

乙某未亡人 現存

(中略) 乙某の次女 乙某存命中、小間使に手を着け、其腹に出來たる女なり、其小間使ハ此女を分娩する時死にたり。されハ戸

籍上の経過をいへば此次女は一旦ハその小間使の私生児として届出られたるを、後日乙某が認知して(即ち自己の女なるを承認して)我家へ引き取りたれば其際此次女の身分は変更して乙某の庶子となりたるべし<sup>(3)</sup>、さて生長後出で、丙某に嫁したるに結婚後幾もなくして丙某は病死したり、因て実家に歸りて厄介になりをれど離縁して戻りたるにあらねバ尚ほ丙某の未亡人として其姓を名乗りあるなり、但し此丙某の家は分家ゆゑ(又は廢家を再興したるものとしてもよろし)之を廢家となして全く実家に復籍するも差支へなけれど本人の希望によりて尚ほ亡夫の姓を名乗りをる也)

さて問題ハ

前記の次女ハ現に独立して生活することになりたれば実家の保護を受け居るに非ず

甲某は次女の家出後長女を離婚して実家に復籍したり

甲某は更に曾て我義妹たりしことある前記乙某の次女と結婚せんと欲す

現行民法ハ此結婚を許すや

(書簡二五三)

この結婚に法律(明治三十一年に施行された民法)上「異論があるやうでは困る」と細かく指定して確認する二葉亭の熱心さは、この問題がこの作品の本質的なところであることを示そう。

小夜子の悩みは、純粹に彼女の内面の問題でなければならぬ。そのために、彼らの結婚は、哲也が時子と離婚しさえすれば、民法で保障されなければならなかったのである。

② 内田魯庵「くれの廿八日」

「其面影」の問題点（「茶筌髪」から「其面影」への屈折）を見やすくするために、源流として強調しなければならないものに、あまり知られていない作品であるが、二葉亭の近しい友人である内田魯庵が十年以前に書いた作品「くれの廿八日」がある。これは、批評家として世にでた魯庵（内田貢）が、明治二十九年にはじめて小説を書いたものであった。

主人公有川純之助は、プレスコットの「政略史」をひもとき「コルテスは戦つて争ひ、われは耕して済すくふ」と言う理想に燃えて、メキシコ殖民の大事業を夢見る。彼はメキシコ渡航費用の援助を条件に有川家の養子となったのだが、媒酌人の御都合主義から其条件が相手に通じておらず、家付き娘である妻がまた、其理想をけつして理解しない。結婚前から交際を続けていた新しい知的でしとやかな女性であるクリスチャンの静江はとりなそうとするが、妻は反って静江に対する嫉妬にとりつかれる。純之助は愛なき結婚を後悔し、静江に愛着するが、静江は家庭の和楽のために強いて身をひき、ぐずぐずのうちに有川家は莢に収まる。

貧民問題の解決として、明治期大規模な殖民が盛んに行われ、ハワイや南米に日系人が広がっていったことは知られるが、二葉亭や横山源之助らも、貧民問題にからめて殖民に非常な興味を示していた。二葉亭の場合は、ロシア極東地方に発展することを、対露政策を兼ねておおまじめで研究しており、日本人売笑婦を進出させる計画を語って知人を閉口させていたことは有名である。

二十九年三月九日の魯庵日記に「毎日新聞に知十を訪ひ、吉佐移

民会社の所在地を問ふて後、会社に末広一雄を訪ふ。」とある。ジャーナリストであった魯庵は、知人を介して移民会社に恐らくは取材におとずれたあと、八月末から国民新聞に長風生の書名で連載の巻頭論文「海外移民」を発表し、その延長上の「日本よりメキシコの観察」が三十年三月十九日に掲載された。

第一回のメキシコ移民約四十名が横浜を出発したのは、この作品執筆の直前、明治三十年の三月であつて、作品世界はそれを反映させたものである。

明治十年代自由民権時代の青年であり、「一度は政治家たらんと欲し、転じて建築に志ざし、再転じて今度は実業界に入らうとした」<sup>(4)</sup>が、「文学に興味を持つやうになつたのも亦、直接には龍溪鉄腸等の小説（注・矢野龍溪「浮城物語」、末広鉄腸「雪中梅」など政治小説を代表するものを指す。）間接には是等の新傾向を胚胎した英国の政治家的な文人の：（「四十年前」）、という魯庵らしく、政治小説に好まれた、国士が海外に雄飛して活躍する、という夢をかたつて小説界に登壇したのである<sup>(5)</sup>。

典型的な政治小説としての特徴を持っている作品と見ることができよう。

しかし、政治小説という国士小説が勢いを失つた現在の目で読むと、気が進まないながら家庭を持った主人公が、クリスチャンである静江の説く「家庭（ホーム）」や「恋愛（ラヴ）」という理想<sup>(6)</sup>によつて説得せられ、家庭の平和を維持するために壮途をあきらめる過程が、むしろ強くひびく。これがもうひとつのこの小説のストーリーである。

発表当時から評価の角度は社会小説と読むものと宗教小説と読む(岩城準太郎「明治文学史」など。事実、ここに静江を中心に展開されるキリスト教の問題は、それまでの小説にはほとんど取り上げられたことのなかったもの。)ものと、大体二つに分かれている。

この作品に描き出された主人公は、二葉亭をいたく刺激した。

「暮の二十八日」(中略)発行後二週間ばかりして長谷川二葉亭を訪ふと、座に就くや否や、「到頭生捕られたネ」といふ。何の事か解らぬので問返すと、「暮の二十八日」は長谷川の家庭を書いたのだと独りぢめしてゐて、「イイサ、小説に生け捕れるのは関はんがネ、あれぢやア書き足りてゐない、モ一度後談を書き玉へ、材料は今度は生捕られるツモリで提供しよう」と独り呑込んで了つて(後略)。(内田魯庵「暮の二十八日其他」『早稲田文学』大正一五・一)

最初の妻であるつねとの長引く離婚紛争中に書いたと推定できる坪内逍遙宛の書簡で、二葉亭は一女性の名を挙げ、「ちかの一件はいまなかなか結婚などの事をおもう余地なく候つねハ後妻を迎ふるものなら彼人をと申候へど肝腎の小生が其気になれ不申候」(月日不明)と述べている。このちかは二葉亭の友人杉野の妹であり、二葉亭の結婚前から親しい交際があり、生涯独身ですごしたという。また、前出の十川信介は、中村光夫からの教示として、福井つねの娘(二葉亭と離婚後の子)の談話によれば、つねには芸者をしていた妹きよがあり、二葉亭夫婦と一時同居していたが、あまり品行のよ

くなかった二葉亭が彼女と関係を結び、つねが大いに怒った事件があったということ伝えてある。どちらが実際に近いのか、また、単に海外進出を夢見ながら現実には日本の家庭運営に苦勞して身動きが取れないでいるインテリゲンチヤのひとりとしての鬱屈した日常の感情が身近に感じられたのか、は別として、二葉亭は、自らの深刻な状況を当時この作品世界に重ね合わせたことはたしかである。

文壇の「帰り新参」として二葉亭は周到に作品を準備していったが、未亡人と既婚の男性との恋愛・再婚が成立し得るよう、同情できるよう、設定に工夫を重ねるほど、二葉亭にとって人ごととして書き得ないほど現実に近いものになってきた、と考えられる。

そして、「浮雲」の文三に投影した自分、「暮の廿八日」に書かれた(?)ころの自分、さらに現在日露戦後の自分、と対比して考えた時、どうしても、意気盛んで前途も有望だったが、ただ不遇を託っていた嘗ての自分と、大陸行きに失敗して、内地に舞い戻ってきたからの自分<sup>(6)</sup>とを並べて、自分の中にある性格上の欠点とでも言うべきものがクローズアップされて感じられたのではないか。

草稿がいずれも戦争未亡人問題になんとか収斂させようとするものであることからみて、構想のかなり最後にきて、テーマは変更されたことと見ることができらるだろう。

作者の力点は、小夜子の、教義と愛情という「二つ心」よりも、むしろ哲也の、愛情と行為、理想と現実という「中心点が二」あって定まらない性格に移動した。二葉亭は再び自身の精神的自画像を描く羽目になったのである<sup>(7)</sup>。こうなると、小夜子の方の葛藤は描かれ<sup>(8)</sup>、一方、哲也に投影されるインテリの実行力のなさが容赦なく描かれることになる。

「茶筧髪」と「其面影」の間の大きな変化は二葉亭の意識のなかでテーマが変わったことで一気になされた。

「茶筧髪」の四種の草稿にはなく、新たに書き加えられたのが「現実主義者」葉村であった。冒頭、葉村と小野が話し合いながら九段坂を歩き、葉村が小野の優柔不断な理想主義を冷やかしを交えて批判するところは、「浮雲」の冒頭の構図（昇と文三が赤坂見附を歩きながらの対話。罷免された文三に昇が、要領が悪すぎると批判する。）と酷似していて、いやでも重ね合わされるところである<sup>99)</sup>。しかし、この二組の人物をつなげてみると、嘗て秀才で理想家だった小野（文三）は、生活力がなく出世も学問上の成功も取り逃がして中年となり前途に希望を描けなくなっており、一方葉村（昇）は常に現実的に立ち回ってこれまで世の中を上手に泳いで来ることによって、自信と明るい見通しを身につけるにいたっている。かつての、理想主義者と現実主義者の対立は、理想を見失った理想主義者と、「一種の理想」を身につけた現実主義者の対立に変わった、という見方は正当であろう。

「浮雲」と「其面影」の年齢設定の間に横たわる二十年間は、実際作者自身がすごした二十年間への苦い評価が反映していると考えられる。

## 二、「家」をまもる法

### ①「女学生」と恋愛—小夜子たちの可能性

「社会百面相」など、現代風俗のルポライターとして筆を揮うようになっていく内田魯庵は、「くれの廿八日」の中で、殖民政策を画策する男主人公に対するに、クリスチャンの女学校出の女副主人

公を配して、両性ともに、当時もつとも目新しかった風俗と主張を描いたわけである。日露戦後になるとその魯庵が批判的に揶揄したように、ミッシヨンスクール出の「新しい女」は一層耳目に投じるようになっていた。

小夜子にしても、おとなしく、忍従ばかりの可憐な弱さに傾いているように今日の読者にはうけとられがちであるが、時代的にみれば極めて新しいタイプに属する。ミッシヨンスクールを卒業しており、「学校に居る自分は、有名なお転婆様」(三三八頁)だったし、家庭教師先で請われればヴァイオリンを弾いたりする。(二七五頁)また、絹フラシのショールを蝶々でとめ(三三四頁)、洋食を食べに行っても「ナイフ、フォークの使い方もなかなか堂に入って」いて哲也を感じさせた。(三三六頁)

文学に初めて女学生を活写したことで知られる小杉天外「魔風恋風」(明治三十年)の主人公初野が、リボンをなびかせて自転車で颯爽と登場したのをはじめとして、彼女たちはハイカラさんであり<sup>100)</sup>、西洋型教育による所謂「書生」の出現から少し遅れて、女子のほうに及んだ新形象であった<sup>101)</sup>。明治三十年代の文学に、彼女たちの姿が新しいヒロインとして登場した。

自由に恋愛の対象を選び、男にも愛が「いきがかり」でないことを示す具体的な行動(決意、覚悟)を求め、世間の慣習としての結婚に恋愛と言う至上のもので挑戦してゆき、場合によっては姦通罪<sup>102)</sup>などの法的制裁をうけるのも、少なくとも文学世界においてはこの女学生たちだった。

二葉亭が「其面影」の構想を練っていた頃評判になっていた新聞小説(明治三十八—三十九年)は小栗風葉の「青春」だった。これ

は大学生と女子大生という新しい世代の代表者たちが、結婚と言う慣習に逆らって恋愛を求めたものの、結局は墮胎という罪<sup>16</sup>を犯し、一方は投獄されて駄目になっていく物語である。

女学生たちが、往々にして悲劇のヒロインとなったのは、偶然だろうか。

その時代、女性が自立できるわけではなかった。小説中の女学生たちのその後を見ても、結婚せずに自活する道は、女家庭教師、またはミッシヨンスクールの女教員であり、高等教育のない場合は女工か電話交換手、更には女中か看護婦くらいしかなかった。小夜子も、「如何<sup>17</sup>かして、電話交換手に成つても好いから(自活の道を求める)」と言っていた(三四一頁)が、独歩の「二少女」に描かれたように、電話交換手としての収入はわずかで生活は苦しかった<sup>18</sup>。「魔風恋風」の初野は、「卒業さえしたら教師になれる、(そして自活できるのだから……)」と言いつつ、困窮の度を増す暮らしの中で、泣いて妹を奉公にだした。しかし、教師として得られる収入も決して多いとはいえなかったのである。「暮の廿八日」の中でも静江はミッシヨンスクールの女教員をして暮らしを立てていたが「俸給二十円で」「なにさえらそうに」と純之助の妻に軽蔑されていた。哲也の妻である家付き娘時子も、いざ離縁されれば生計を立てる道はなかったのであって、夫を奪う小夜子は現実的に「泥棒猫」<sup>19</sup>とののしるに足る。姑が、いよいよ夫婦喧嘩が深刻になると見るたび口を出して、内心舌を出しながらであっても慇懃悪丁寧に詫びを入れて事を収めるのもそのためである。他方、にくい他人からならいざ知らず姉から夫を奪う行為は、姉が現在義兄を苦しめている、と

いうようなことでもなければ小夜子は決して正当化し得ない。

「其面影」においては、未亡人と既婚男性という「茶筌髪」以来の設定が尾をひいていたがために、小夜子は恋愛の成就とともにむしろ法律上の罪以上の「罪」の意識を抱え込まなければならなかった<sup>20</sup>。女性に自立の道がなく、事実上生活を法的な夫に依存して生きたことはこの作品においても、破婚を道義上阻害する(そして「たとえ形だけでも」家庭を維持する)要因になった。

「其面影」は、日本の現実を踏まえた恋愛のリアリズム小説であったともいえよう<sup>21</sup>。

## ② 「金色夜叉」

法律の仕組みを詳しく知り使いこなして筋立のリアリズムを獲得した作家に、たとえば尾崎紅葉がいる。一世を風靡したベストセラー「金色夜叉」をとつても、宮と別れて金貸しの手代と成り下がった貫一を慕う女金貸し(赤檜満枝)は、表向きは常に夫の「名代」である。既婚女性の財産管理権は夫にあり、従って筆頭として金融資を営むということは現実にはありえなかった<sup>22</sup>。その他の点でも紅葉は、満枝や間一が阿漕に金貸しをやって恨みを買う次第を、公正証書や手形の書き換え、差し押さえやその期間などの、法律的な点を非常に正確に筋の進行に書きこんでいる。そのなかにあつてこそ、「ダイヤモンドに目がくらみ」宮が有利な成婚に過つ、というストーリーが生きてくるのであろう。

## ③ 「それから」

刑法が成立し<sup>23</sup>、一八三条姦通罪によって、「有夫の姦」は妻と其

相手が二年以下の懲役とされた。夫から訴え出ることが条件の、親告罪であった<sup>20)</sup>。

「それから」(明治四十二年)執筆にあたって漱石は、其状況をふまえて、この姦通罪が成立しないように、腐心している。と同時に、読者にも、法的には罪でも内的には罪でない、と感ぜられるように描こうとしていると思われる。

まず、代助は三千代を結婚前から愛して居たのに義侠心のようなものから友人に譲ったことになっている<sup>21)</sup>。三千代の側からすれば、思いがけず代助に捨てられて、寄る辺のないところからやむなく平岡に嫁いだのである。その後代助は独身を続け三千代はからだを弱くして夫婦の仲はうまくいっていない、其結果として平岡は外で遊んでいるというような生活条件である。

再会したのは、二人が実際に肉体的な関係を結ばないように<sup>22)</sup>、漱石は苦勞している。二人が気持ち確かめ合った直後三千代が病を發して重態になるという結びは苦肉の策とみることできる。

### 三、むすび

「くれの廿八日」で捉えられたキリスト教的な「ホーム」の道徳は、そのまま明治の世に広く根づくことはなかったが、「家族制」すなわち核家族内の秩序を制度化するという形で現実のものとなった。明治三十一年に民法によって成文化され、四十一年の刑法によってさらに整備された。そして、男女は法による制裁によってあるいは縛られ、あるいは保障されてホームに縛られるようになる。恋愛を追究しようとする文学において、主人公たちは、それまでの日常にはさして意識していなかった法の目に、ぶつかり出し、多くの

場合そこに絡めとられていった。作者にリアリズムの目が養われている限り、「恋愛の神聖」を素朴に謳うことはできなかった。二葉亭が民法に照らしながら筋を運んだことは既に見たとおりである。

「それから」の代助が、法律上平岡の妻である三千代への愛を貫くことを決意したとき、平岡に難詰され「矛盾かも知れない。然しそれは世間の掟と定めてある夫婦関係と、自然の事実として成り上がった夫婦関係とが一致しなかったという矛盾なのだから仕方がない。」と応え、「自然に返るのだ」と心に思うのは、重要な点だろう<sup>23)</sup>。

文学において恋愛小説という新しいジャンルが定着した明治三十年代に、同時に「カタチだけの夫婦」(と恋愛の対置)というテーマが、「其面影」「金色夜叉」<sup>24)</sup>「それから」などに共通して出ているのが、興味深い<sup>25)</sup>。

### 参考文献

『二葉亭四迷全集』 筑摩書房 (本稿において二葉亭四迷の作品、書簡などの番号、頁数はこの全集による)

『内田魯庵伝』一九九四 野村喬 リプロボート

『内田魯庵全集 第四卷』昭和六十年 ゆまに書房

『日露戦後文学の研究』下 昭和六十年 有精堂出版 平岡敏夫

『二葉亭四迷研究』十川信介 二葉亭四迷研究の古典といってもよいが、

本稿もこの先行研究に多くを負っている。特に記して感謝する。

『六法全書』昭和五年 岩波書店

### 註

(1) 現存する「茶筌髪」系の草稿は四種、全て断片であり、登場人物名もそれ

それぞれ違っている。ひとつの草稿中でゆれがある場合もある。

(2)すでに「浮雲」第三篇執筆中から、二葉亭は、ハイカラだが軽薄なお勢のかわりに、肯定的な女性像を、「信徒」として描きたいという欲求を持っていた。

(3)明治の民法のもとでは、生れた子は、

嫡子 (法的婚姻内に生れた子)

庶子 (法的婚姻外に生れた子)

私生児 (父親の認知がなく、父不明として母の戸籍に入る子)

の三つに区別され、法的権利の上で著しく差別がついた。

(4)エッセイ「政治小説を作るべき好時期」(明治三一・九)からの引用

(5)明治時代に西洋の影響でラヴが「発見」された、近世以前は色、すなわち遊里の女性との間の恋情しかとらえられていなかった、という見方は比較文学研究の大きなテーマとなっている。

(6)二葉亭は明治三五年、東京外国語学校教授の職をなげうって大陸に渡り、北京の京師警務学堂提調代理という不安定な地位に就いたが翌年には断念して失意のうちに帰国していた。

(7)二葉亭を私小説の元祖と見る見方がのちにおこったのもうなずける。

(8)その結果、小夜子はしとやかさと愛に生きる決意をする凛とした強さを併せ持つ、明治文学史上でもっとも魅力的なヒロインとなった、と考えられる。

(9)両編の冒頭部を対照してみよう。

…見附の内より兩人の少年が話しながら出て参つた 一人は…秀た眉に  
 巖然とした眼付…非道くやつれてゐる故か…今一人は…中肉中背で色白の  
 丸顔…顔立がひねてこそせせしてゐるので何となく品格のない男…乙な編  
 羅紗でリウとした衣装附…「それは課長の方が或は不条理かも知れぬがし

かし苟も長官たる者に向つて抵抗を試みるなぞといふなア馬鹿の骨頂だ…

(「浮雲」冒頭)

…或夕ぐれ、九段坂を漫々登つて行く洋服出立の二人連がある。一人は  
 …面長で頬の削けた、眉の濃い割に髭の薄い、何処となく貧相な、一見し  
 て老書生という風采の男で、…横太りの方は薄い眉にきよろりとした眼、  
 …逼迫しい面貌の、品格のない男、その代り服装は凝つたもので、…「苟  
 も金が儲けてえんなら、人情なんぞ未練気なく洒然と棄てつたふんだ」  
 (「其面影」冒頭)

(10)「ちか頃はハイカラ趣味に浮身を窺し」「ぐつとハイカラにきましたし」と

二葉亭自身「其面影」の執筆中に自作の計画について語っている。

(11)坪内逍遙「当世書生氣質」を例に持ち出すまでもなく、明治になって現れた新人種としては、まず官員と書生が挙げられよう。

(12)「其面影」執筆時にはまだ成立していない。「それから」で問題となる。

(13)墮胎罪は刑法第二十九条

(14)「三四郎」の美禰子のような気性の勝つた女性も嫁いで行き、三四郎は「ストレイシープ」という一言を残され呆然とする。

(15)…お秀は局を勤めるやうになつた以来、真だ二年許りであるから給料は漸と十五銭であつた。…お秀の給料と針仕事とは三人の口はとも過活されなかつた。(「二少女」明治三十一年)

(16)恋愛そのものは、相手の男がきつぱりとした態度をとつてくれさえすれば  
 なんの罪の意識も生じ得ないもの、むしろ、慣習に対する恋愛の勝利であり、  
 悲劇があるとすれば、その女性側の期待にこたへるべく男性が恋愛を重視し  
 ないという行き違いであるはずである。ツルゲーネフの「アーシャ」  
 (二葉亭が「片恋」として訳出)やゴンチャロフの「断崖」(二葉亭が「浮  
 雲」のモデルにしたと言われ、梗概やメモが二葉亭手帳に見られる)など、



ロシアの十九世紀の小説、ことに、二葉亭が親炙した作品にこのテーマがはつきり見られるのは、面白いと思う。

(17) 法律上、「無能力者」と条文上に記載される存在であり、財産の処分権や管理権、一身の処置上の決断の権利などが認められていなかった。(民法総則一四、一八条を参照) この条項は昭和二十二年の民法改訂で削除されて今にいたる。

(18) 明治一三年の太政官布告を改めて明治四一年に施行されたり一九四七改訂(19) 有夫ノ婦姦通シタルトキハ二年以下ノ懲役ニ処ス其相姦シタル者亦同シ前項ノ罪ハ本夫ノ告訴ヲ待テ之ヲ論ス但本夫姦通ヲ縦容シタルトキハ告訴ノ効ナシ(第二十二章第一八三条)

(20) のち、大正三年になって、「こころ」が書かれるが、これは、友人の心を知りながら友情を踏みこじって恋愛の勝利者になった「先生」が、結局は自分を自分で責めて自殺に至るはなしである。それと合わせてみればその裏がえしになっているので、読者には二重奏の効果があるだろう。

(21) 漱石の書簡に、「二人が姦通しそうで困っている」とある。

(22) しかし、周囲からは「悪さ」とよばれ(兄の台詞) 父親から「勘当」されて生活の途を失う。これが、当然であった。

(23) 「金色夜叉」は統編、続々編、…と、宮の家庭に少しずつ齟齬ができてきて、ついには宮が恋人を捨てて愛のない結婚をした錯誤をさとして、我が身を捨てる覚悟で貫一の前に悔悟するまでを書き接がれた。

(24) 世の中姦通小説おおはやり、と揶揄した評論もあった。

## Law in Literature (1) Meiji 30's “SONO OMOKAGE”

Yuri Kato

The Civil and Criminal laws, which were brought into effect in 1898, prescribed, how people must obey the rule of “family”. Novelists, who considered that the real life must be reflected in their novels, studied the system of the reality, when they wrote. We can see the new context of love story in their novels. For example, the author takes into consideration “Sono Omokage” Futabatei-Simei and the influence of the active laws on it.